

## 優れた研究と大きな嘘（特集 本の森への道案内）

著者	福嶋 路
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	240
ページ	34-35
発行年	2015-09
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00003122">http://hdl.handle.net/2344/00003122</a>

# 優れた研究と大きな嘘

福嶋路  
【経営学・地域企業論】

大学院の学生の頃いわれた言葉のなかで時々思いだすもののひとつに、「大きな嘘をつけ」というものがある。当時、研究者の卵であつた私は、その言葉に驚き、違和感を感じたものだ。

研究には嘘があつてはいけない。特にデータを捏造したり事実を捻じ曲げたりすることは許されない。そのような小さな嘘はばれやすく、ばれれば研究全体の信ぴょう性が疑われる。だから「小さな嘘」はついてもあまり意味がない。他方、かつてアドルフ・ヒトラーが「たいていの人間は小さなウソよりも大きなウソにだまされやすい」といったそうであるが、現実の見方ががらりと変わるような、「壮大な嘘」には世のなかを変える力がある。

しかしみんなが信じるような大きな嘘をつくのはそう簡単ではな

い。それにはいくつか要件が必要となる。主張の大胆さや新規性、それと同時に人々に「なるほど」と思わせる説得力、一貫した矛盾のないストーリー。さらに細部の嘘によって全体が疑われかねないので細かい事実の積み重ねも必要になる。しかしよくよく考えてみると、壮大な嘘の特徴はよい研究にも共通するのではないであろうか。

データを丁寧に分析・精査しながら、そこから読み取れることだけしかいわないというのは研究者として誠実な態度であろう。しかしそれだけで社会科学の進歩はあつたのであろうか。どこかでデータとデータの間に「行間」を想像力を働かせて埋めながら、「壮大なストーリー」を創出した著作は、新たな視点と世界観を提示する。またそのような著作は、

読み物として魅力的だし、文学作品的な要素を多分に含んでおり、読者を知的にわくわくさせてくれるし、インスピレーションを与えてくれる。以下、私にとつてのそんな著作を三冊を紹介したいと思う。

## ●ジェイン・ジェイコブズ 『都市の原理』（中江利忠・加賀谷洋一訳）鹿島出版会、二〇一一年

本書ではアダム・スミス、カール・マルクスなど経済学の巨人たちが暗黙裡に共有している「最初に農村が生まれ、これが町になり、都市はその後に現れる」という前提に対して敢然と異を唱え、「初めに都市ありき、そして農村が発展する」という説を展開する。そしてこれまで分業の機能として効率性のみ目が向けられがちであ

つたが、ジェイコブズは分業の新しい財貨やサービスを経済に追加し多様化と創造性をもたらすという、分業の創造性を強調した（「ジェイコブズ型外部性」といわれる）。そしてニューヨーク州の女性ドレスメーカーからブラジャー産業が発生してきた経緯や、3Mの多角化の事例、さらに日本の自転車産業など豊富な事例を提示し、経済成長における都市の創造的な役割を主張したのである。

ジェイコブズの著作に対してはファンも多いが、同時に批判者も多い。批判者の何人かはこれら著作を「お話」であるというものだ。確かに歴史家や経済学者などからしてみると、データの扱いや解釈が不十分であるとか恣意的であるのであろう。しかし彼女の自由で大胆な発想とそれを説得するため豊富な事例、ストーリー展開は、読み手を引き込み、それを差し引いても余りある知的刺激がある。

## ●アルバート・O・ハーシュマン『経済発展の戦略』（小島清監訳、麻田四郎邦訳）巖松堂出版、一九六一年

ハーシュマンは経済発展に対して新たな見方を提示し、既存の均

整成長論に対し不均整成長論を提唱した論者として知られている。

しかし彼の著作のなかにはそれ以外にも多数の知的好奇心をかき立てる魅力的な考え方や言葉に溢れている。

例えば、経済発展の所与の資源や生産要素の最適結合をみつけようという既存の考え方に対し、経済発展には「隠された、散在している、もしくは利用の稚拙な資源や能力を、発展目的に即応して喚起し協力させることの方が重大である（九ページ）」と主張する。

そして稀少な諸資源の最大化能力を喚起し動員する「圧力」や「誘導機構」を作り出すことがそれを実現するための手段となるという。このような発想は、企業経営や地域おこしなどにも十分応用できる。

またハーシュマンがこれまでの主流の経済理論が暗黙のうちに前提としていたことを次から次へと論破し、「変動観念」「決意形成」「実行力」「不均衡」「誘発」といった聞きなれない独特な用語を駆使し、これまでの経済学でみていたものとは全く異なる世のなかの姿をみせてくれるのは大変小気味いい。

ハーシュマンは主流派とはなり

えなかったが、目から鱗が落ちるような着眼点、独自の概念、それを駆使した骨太な理論展開は、知的巨人という言葉が彷彿させる。彼の他の著作も、経済学専門の人間でなくとも示唆を獲られる名著が多い。

## ●アナリー・サクセニア

### 『現代の二都物語』（大前研一訳）講談社、一九九五年

本書は、アメリカを代表する二大ハイテク・クラスターである、シリコンバレーとルート128の

比較研究である。軍事産業を基盤とする同じような出自でありながら、一九八〇年代の急激な環境変化のもとで二つの地域は対照的な道を歩む。その理由を、両者の地域産業システムの違い、つまり水平的な企業間ネットワークからなるシリコンバレーと独立した企業群からなるルート128に求めた。そして地域産業システムという概念を提示し、これまで企業や産業レベルで論じられていた競争戦略論に地域という視点を与えた。

ハイテク・クラスター論の先駆的な研究となった本書に対して高い評価が多勢を占める一方で、「ナラティブ」であるとか「理論

的な貢献は弱い」という批判がなされることがある。また全体としてストーリー先導的であり、両地域はそこまで対照的なのかという批判もある。しかし本書のシリコンバレーとルート128を、膨大な資料をもとにしながらも、些末な違いは殺ぎとり、あえて二つの地域のなかのロジックを対比的に描くというわかりやすいストーリー展開は、読む人を惹きつけるし、その後の研究に大いにインスピレーションを与えたのではないかと思われる。

以上挙げた三冊の筆者は共通点をもっている。第一にその時代の「主流派・正統派」に果敢に大胆に挑み、彼らの前提を疑うような深い疑問を呈しているという点である。だからこそ彼らの展開する主張には、はっとさせるような気付きや驚きがある。

第二に、実は彼らは現場にとっても精通していたという点である。彼らのストーリーの背後には膨大な実体験がある。ジェイコブズは都市に住む市民運動家であったし、サクセニアもボストンに生まれ、その後カリフォルニアに移住したので、両地域を知り尽くしている。ハーシュマンに至っては発展途上

国の多数の開発プロジェクトに実際に携わっていた。彼らは現場を知り抜いているからこそ、正統派や主流といわれる論とは一線を画する、大きな嘘、いや独自性の高い理論を打ち立てることができたのではないかと思われる。

第三に彼らの著作は読み物としてとても魅力的であるという点である。えてして研究者は厳密性にこだわるあまりに、読者に「読ませる」ということを忘れがちである。しかし社会科学にはアートの要素も含まれており、それが社会科学の特長でもある。彼らの著作はそういう意味でも優れている。彼らの著作を「壮大な嘘」というと語弊があるかもしれない。ただ多数の人々に信じてみたいと思わせた名著であることは疑いがない。

（ふくしま みち／東北大学大学院経済学研究科教授）